

産経新聞の下記記事を読んで驚きました、3年近く経ってからの調査報告書がこの程度としたら、日本の原子力規制委員会に事故を調査する能力があるのか疑わしくなって来ます。

福島第1事故で規制委：全電源喪失「津波が主因」、月内にもIAEAへ報告

産経新聞 2014年1月9日(木)

原子力規制委員会が、東京電力福島第1原発事故を分析した調査報告書をまとめ、早ければ月内にも国際原子力機関(IAEA)に提出することが1月8日、分かった。
規制委の報告書は「津波が主因で全電源を喪失」となる見込み。

福島第1原発事故の分析

論点	規制委の見解
非常用復水器(IC)の損傷原因	地震の揺れで壊れた証拠はない
1号機4階の出水原因	5階の燃料貯蔵プールの水が地震動であふれ、ダクトを通じて4階に流入した
津波の到達時刻	波高計の記録と津波の伝播時間の解析から、「午後3時36分」と推定
4号機原子炉建屋の水素爆発	3号機で発生した水素が4号機建屋に流れ込んだと考えるのが最も妥当

比較のために、米国で2003年に起きたスペースシャトル「コロンビア号」の墜落事故の最終調査報告書を見てみましょう。本報告書はなんと半年後に出されています。

この事故は、打ち上げ時に断熱材が剥離して翼を損傷させ、地球へ帰還した際の高熱で機体全体が破壊されたことが直接原因です。しかし、米国の調査報告書を見ると「直接原因よりも、背景となる原因(根本原因:Root Cause)の解明こそが重要である」との理解から、大部分が根本原因に関する記載です。(下記記事は、文章が読めないように、精細度を落としています)



元々、国会の事故調査委員会(黒川委員会)が、「福島1号機建屋のIC(非常用復水器)付近で液体の水を見た」という現場員の証言に基づき「地震による機器損傷で小規模の冷却材喪失が起きた」と推論を出したことが発端です。2011年にこの証言を聞いた時に「この水はどこから来た

のか」を考えました。

①第一に心配したのは、当然、原子炉の高温蒸気が漏洩した可能性です。しかし、約 300 度もの高温蒸気が漏洩しても、冷やされる環境になれば、液体の水になりません。従って、原子炉からの蒸気ではありえません。

②IC は約 500 トンの水を保有しており、IC 外側が破損すると、漏水が起こりえます。しかし、事故後の IC には、かなりの水が残っており、IC の破損ではありません。(IC が作動しなかったことは重大な問題ですが・・・)

③IC のある 4 階の丁度上には使用済み燃料プールがあり、数千トンの水を保有しています。2007 年の柏崎地震の際に、燃料プールの水がゆっくり揺れる現象（スロッシング）が起きて、燃料プール外へ溢れたことは良く知られています。しかし、燃料プールのある 5 階とは連通しているものの、連通箇所は燃料プールの反対側で、どうして IC 室まで水が行ったのかは当時は分かりませんでした。

④IC 室より上方には、上記以外の水はありません。

後に、東電は設計図を基に、③の漏洩経路を推定しました（下記を参照）。しかし、これがない段階でも、上記の考察から、①②ではありえないと推論できます。実際、政府の事故調査委員会（畑村委員会）も同様の結論を出しています。従って、黒川委員会の結論は誤っており、今更、原子力規制委員会が反論するまでもありません。こんなことに時間を費やすより、根本原因の解明と改善をすべきです。

なお、黒川報告書は、原子力の規制体系の改善など、根本原因に関する重要な指摘をしており、メディアもこちらに焦点を当てて欲しいものです。

2014/1/14 記

